第13章　本研究の限界と今後の課題

本研究から，先行研究に対して意義のある，新しい知見がいくつか見出された．そして，それらの知見をもとにして教育的介入への示唆も得られた．しかしながら，同時にいくつかの課題も残されている．個々の研究における課題は，すでにそれぞれの研究のところで論じられたので，本章では，本研究全体を通しての，本研究の限界と今後の課題について論じる．

第1に，評価－接近目標がどのような条件の時に最も抑うつ傾向を抑制する適応的な役割を果たすか，また，抑うつ傾向を積極的に抑制しない働きがあるとすればそれはどのような条件の時かを，詳細に検討する必要がある．

本研究の結果から，評価－接近目標の高い生徒は，友人関係を構築・維持する振る舞いを積極的に行うことができ，その結果ポジティブな出来事を数多く経験するために，また，友人からのポジティブな評価を期待することで，友人の反応をポジティブに知覚しやすくなるために，抑うつ傾向が低くなっていることが示された（研究8，9，10，11を参照のこと）．この結果を踏まえると，評価－接近目標は，特に，友人関係の進展段階における，「関係構築の段階」と「関係維持の段階」において適応的な役割を果たすと予測される（第10章第3節第2項も参照のこと）．つまり，関係を構築する段階では，相手から良い評価を得られることや好かれる可能性を考えることにより，自分は相手に対して積極的に振る舞うことができるのであり，逆に，相手からの悪い評価や嫌われる可能性を考えた場合には，思うように振る舞うことができず，関係の構築が

スムーズにいかないと考えられる．そして，築いた関係を長期にわたって円滑に維持していくためには，自分が相手から受け入れられるように努力することが必要であるため，評価－接近目標をもつことが必要となろう．今後は，友人関係の進展段階（関係の構築，維持，深化の段階）毎に，評価－接近目標が抑うつ傾向や対人適応にどのように影響するかを検討することにより，評価－接近目標が適応的な役割を果たす条件を明確にする必要がある．

一方で，本研究の結果から，評価－接近目標は，ネガティブな出来事が生じた時にその影響を積極的に緩和する働きをもたないことも示された（研究５）．従って，評価－接近目標は，ポジティブな出来事を経験している限りにおいては適応的かもしれないが，ネガティブな出来事が発生した場合には，適応的な役割を果たさないと言うことができる．今後は，ネガティブな出来事が発生した場合以外の条件において，評価－接近目標が抑うつ傾向を抑制しないことがあるのかどうかを検討する必要がある．

また，上述のことも踏まえると，「良い評価を得ようとする」評価－接近目標でも，特に，「友人から良い評価を得られる（好かれる）可能性に関心を向けて，友人に接近させる」評価－接近目標，あるいは，「円滑な関係の構築･維持のための１つの手段として良い評価を得ようとする」評価－接近目標が，適応的な働きを果たすと考えられる．一方で，評価－接近目標でも，「自己証明のために」良い評価を得ようとする評価－接近目標，ないしは「自己評価を他者からの評価に依存しているために」良い評価を得ようとする評価－接近目標は，特にネガティブな出来事が生じた時に，不適応的な反応を促進するかもしれない．本研究においては，評価－接近目標を，「相手から良い評価を得られたり好かれる可能性

に関心を向ける」ないし「円滑な関係構築・維持の１つの手段としての」評価－接近目標と，「自己証明のために良い評価を得る」ないし「他者評価に依存しているために良い評価を得る」評価－接近目標とに，厳密に区別して検討していなかった．従って，今後は，評価－接近目標をより厳密に定義・区別して，抑うつ傾向などとの関係を検討する必要がある．

第２に，本研究は質問紙調査による研究であり，因果関係についての確証が得られたわけではない．今後は，より自然な対人相互作用場面や自然観察などを用いて，準実験的に，友人関係における目標志向性が対人行動，友人関係の構築や維持，抑うつ傾向の発生に与える影響について検討する必要がある．

第３に，本研究においては，中学生を調査対象としていた．従って，本研究の結果を他の年齢段階にも当てはめることができるかどうかは，現時点ではわからない．今後は，小学生，高校生，大学生を対象として，友人関係における目標志向性が抑うつ傾向に与える影響について検討する必要がある．

最後に，本研究で取り上げた抑うつは，臨床場面でみられるような重度の「うつ病」（疾病単位としてのうつ病性障害）ではなく，日常的にしばしばみられる，軽度の「抑うつ傾向」であった．従って，本研究の結果は，そのまま子どものうつ病性障害に適用できないことを記しておかなければならないであろう．